

さつまいも

ヒルガオ科：中南米低地

栽培暦

月 旬	3			4			5			6			7			8			9			10			11							
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下					
主 な 作 業	早掘り栽培			マルチ栽培																												
	○			●			~~~~~																								■	
普通栽培																																
○			●			●																		■								
伏せ込み			植え付け																					収穫								

■栽培のポイント

1. 苗は茎がやや太めで、節間のつまったものを用いる。
2. 窒素肥料が多いといものが繊維質になり味が落ちる。

■品種・種いも量 ベニアズマ、高系 14 号、べにはるか、クイックスイート、あいこまち。早掘り用には高系 14 が良い。種いも量 a 当り 10 kg (苗数 a 当り 380~440 本)。

■育苗 育苗施設があれば自家育苗が望ましいが、購入苗でも可。伏せ込み後 40 日で第 1 回目の採苗、その後は 7~10 日間隔で採苗できるようになる。
伏せ込みが 3 月下旬なので、3 月中旬には育苗床を作る。

育苗床 1 a 分の苗をつくるためには、1 m²の床面積が必要。

床土 無病地の新土 (粘質土) に完熟堆肥を入れ、土量 1 m³当り窒素、リン酸、加里を成分量で各々 300 g 混合する。

種いも 大きさが約 200 g 前後のもので、皮の色、形の良い健全なものを選ぶ。種いもの消毒は、40℃の温湯に 40 分間浸漬処理し、すみやかに伏せ込む。

伏せ込み 種いもは間隔 5 cm、株間隔 15 cm あけて同じ方向に揃えて並べる。いもが隠れる程度に覆土し、その上に切りわらをかけて十分かん水する。さらにビニールをべたがけし、温床全体にトンネル被覆シマットをかける。

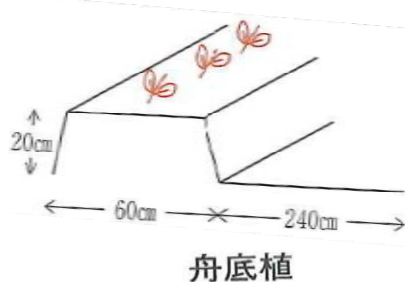
■管理 温床は地温を 30℃に保つと 7 日程度でほう芽する。ほう芽したらべたがけフィルムを取り除く。葉焼けしないように温床の温度を日中 25℃、夜間 18℃を目標に管理する。ほう芽後 2 週間目に液肥を施用する。高温多湿では茎の太い軟らかい苗、密植すると茎の細かい軟らかな苗になる。苗が硬すぎるといもの太りが劣る。

施肥例

(a 当り)

うねつくりと植え付け方法

肥料名	基肥	追肥	備考
磷加苦土安1号 消石灰	12kg 6	-kg -	成分量 窒素 1.0~1.5kg 磷酸 0.9~1.5 加里 0.7~1.5



舟底植

■採苗 展開葉7~8枚になったら地際の葉2枚残して採苗する。苗の葉数が5~6枚で節間がつまったやや硬めの苗が良い。



■植え付け準備

施肥 窒素が多いとつるぼけし、いもの肥大が悪い。食味も繊維質となり劣る。少なすぎると茎葉の生育不足となり減収する。特に加里を十分施す。

垂直植



うねつくり うね幅75cm、高さ20~30cmの高うねをつくる。土壤水分のあるときにうねを作り、マルチ栽培の場合はうね幅150cmの2条植えとする。

■植え付け 晩霜のおそれがなくなり、平均気温18℃、地温15℃の時期(5月下旬~6月上旬)が適期である。株間は30~35cmとし、腐y通栽培では水平挿しにして多収を図るが、早掘りの場合は立てて植え、いも数を少なめにし肥大を早める。植え付けは、雨天時のほうが植え傷みが少ないが、晴天の場合はかん水し稲わらで日覆いをする。

■病虫害防除 アブラムシ・イモコガ・ヨトウムシを早期に防除する。

■収穫 収穫は、普通栽培で9月上旬~10月上旬の降霜前の晴天日に行う。初めにつるを刈り、いもを傷つけないように掘り上げる。目標収量はa当り300kg。

ちよつと一服

さといも

さといもの品種は、食用にする部分によって、親いも用品種、子いも用品種、親子兼用品種、葉柄用品種があります。一般に青茎のものは子いも用品種で、赤茎は親子兼用品種です。山形県では、子いも用品種が多く用いられ、土垂、石川早生などがあります。また、庄内地方では、山形田芋(カラトリ)も栽培されています。

食べ方としては、芋煮会で代表されるような煮物が一般的ですが、その他はずいき(葉柄)、やめいも(温床で軟化促成栽培し、軟白にした若い茎)を用いた汁もの、あえ物、ぬた、煮付けなどがあります。